



第 28 号  
令和3年7月29日  
岩手県長寿社会課

緊急特集 コロナ禍の中での居場所づくりを考える

## 認知症カフェの再開の巻

前号では、「通いの場」の再開について特集しました。今回は、県内で100か所以上を数えるようになった「認知症カフェ」の再開について考えます。

体操主体の「通いの場」と異なり、参加者同士の語らいや、歌、ゲームなどのゆったりした時間を楽しむカフェは、「通いの場」とはまた違った課題があります。どう工夫して再開していくのでしょうか。

### 「認知症カフェ」の最近の状況は

「オレンジプラン」で認知症施策の一つの目玉として位置づけられて以降、認知症地域支援推進員の活躍により、認知症高齢者の居場所づくりの一環として県内各地に広まった「認知症カフェ」。

過去の「ちいきで包む」でも、認知症カフェの特集を組んだことがあります（第6号）。当時は事例が少なく、試行錯誤を続けながらの開催でしたが、現在は県内で100か所を超える数のカフェが、地域の皆さんをお待ちしています。



運営には、地域包括支援センター、社会福祉協議会、家族会、NPO、病院、介護事業所など多様な主体が関わっており、活動内容も、参加者同士の自由なおしゃべりのほか、相談、歌、講話、軽い体操などスタイルはさまざまです。誰でも参加でき、認知症高齢者限定の居場所と思われぬような工夫がなされており、名前に「認知症」を掲げるカフェはごくわずかとなっています。

県内各地に広まってきたカフェですが、ここにも新型コロナの影響がかなり出ています。県高齢者総合支援センターが令和2年8月に調査したところでは、回答106か所のうち「一時休業したが再開」が44か所、「休業中」が54か所で、大半のカフェが休業を余儀なくされました。

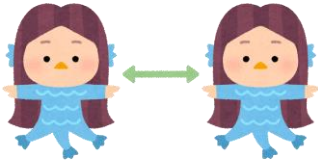
現時点で昨夏以降の統計はないものの、調査以降に県内でもクラスター発生など、感染拡大傾向が続き、福祉施設や病院などが運営するカフェを中心に、休業中のカフェの多くが現在も再開できずにいます。

### 再開したカフェの工夫と再開への課題

再開したカフェでは、検温や消毒などの基本的な対策に加え、次のような工夫をしているようです。

（定員の見直し）人数や周知先の制限、二部入替制

（飲食の見直し）食品提供の中止や個包装化、飲み物の参加者持参への切替



再開の結果、参加者からの反応として、**カフェがあると嬉しい、会話が楽しい**という肯定的な反応があったようです。

一方で、雰囲気異なり**会話が盛り上がらない**、参加者同士の間隔を空ける必要があり、**会話が聞こえない、だんだん近づいてしまう**という、**会話中心のカフェ特有の課題**もあるようです。

また、感染に対する不安は依然として大きく、特に実施主体が介護事業所や病院である場合には、施設そのものへの**立入を制限**していたり、スタッフが**施設業務を兼務**していたりするため、**リスク管理上、再開は困難**とするカフェも少なくありません。今も、病院や施設でクラスターが発生する例が少なからずあり、やむを得ないことです。

これらの点が、住民主体・体操中心の「通いの場」との大きな違いでしょう。

盛岡市によると、市が公表する「**認知症カフェ・家族会マップ**」(R3.4.1時点)に掲載されている**14か所**のカフェのうち、**活動を再開したのは5か所**。休止中のカフェのうち、一部は再開予定ですが、**未だ多くが「再開未定」**のままです。医療従事者が中心となって運営してきたカフェの中には、やむなく解散を決めたものもあり、残念でなりません。

### 再開したカフェの運営の様子は

それでは、今回もまた、再開した認知症カフェの活動状況を見てみましょう。  
職権を発動し、**現場検証**を行います！

——今日(5月17日)は、盛岡市湯沢団地にある「**湯沢地域交流活性化センター**」におじゃましています。これから、毎月第3月曜日の午後で開催されている「**ゆざわの森カフェ**」の様子を見学します。



ゆざわの森カフェは、平成29年10月にスタート。翌30年4月から毎月開催されています。運営は、**都南あけぼの荘介護支援センター**や**飯岡・永井地域包括支援センター**を筆頭に、多くの**住民ボランティア**や**地域団体の幅広い協力**の下で行われています。

早速、受付で氏名や連絡先の記入と消毒、検温がありますが、その対応も**ボランティア**が担っています。



会場を見回すと、参加者よりもスタッフの数の方が多いのでは？と思うほど、老若男女、いろいろな人が動き回っています。実習で包括に来ている岩手医大の学生も、お手伝いに参加しています。

会場は三密を避けるため、かなり広々としています。特徴的なのは、座席の配置を**学校形式**としたこと。**飲食も簡素なコーヒーなど、最小限**に抑えています。コロナ前は、円形で向かい合う形だったのを、感染防止対策として配置を変えているとのこと。

参加者が次々と集まってきました。本日の参加は**12人**で、うち**男性が3人**です。会場は、起伏の多い団地の中心部にある高台なので、ここまでの移動手段は、徒歩、家族や民生委員の送迎、都南あけぼの荘の送迎（デイサービス**送迎の合間**を活用）など、さまざまです。

### **ズンドコ節でスタート**

定刻の13時半になり、まずは体操から賑やかにスタートです。曲は「**きよしのズンドコ節**」。指導するボランティアは、認知症サポーターでもある**シルバーリハビリ体操指導者の米倉さん**。**なぜ体を動かすかの根拠**をきちんと説明しつつ、ユーモアを交えながら進めています。

続いて、**嚥下体操やパタカラ体操**。通常の方法だと飛沫が飛んでしまうので、マスクを外さず押さえながら進めています。また、一度だけ見本を見せて、「**あとは御自宅でやってみてください**」とお勧めしていました。



このほか、**脳トレ**を取り入れた手足の運動や、**シルバー川柳**の紹介など、短い時間ながらもバラエティ豊かなメニューが次々と展開されていました。

これらのカフェの企画は、**月例のカフェ会議**（毎月第2金曜日開催）の場で皆が意見を出し合って考えているとのこと。地域には、さまざまな技能を持つ人がいるので、スタッフから「**次回は〇〇さん呼びたい**」という**アイデア**が次々と飛び出すのだとか。

参加者が体を動かすこの時間にも、座ってくつろいでいる方もいます。

参加者は、この場での活動は自由。**参加したいものだけに参加していい**というのが、このカフェのスタイルです。

## ピアノの音の主は・・・？

30分の体操のあとは、おしゃべりの時間です。隣の席に座った人同士や、間にボランティアや実習生も入り、**つかの間の会話**を楽しみます。

会場内に、静かに**ピアノの音**が響きます。てっきりCDを流しているのだらうと思いましたが…。



…**まさかの生演奏**だった。  
しかも結構うまい。

会話の間、他の女性と交替で弾いていましたが、こういうところにもボランティアの技能が活かされています。それにしても**人材豊富**だ…。

最後に、地域包括支援センターから新型コロナの予防接種について情報提供を行い、14時20分過ぎに終了となりました。現在は**約50分の短縮バージョン**での実施です。

## コロナ禍による活動内容の変化

コロナ禍の前、ゆざわの森カフェは別会場で開催されていました。近隣の障がい者施設が経営する「**オーパ**」というカフェで、参加者は各々、好きなケーキやソフトクリームなどを注文しながら、**約2時間**のくつろぎと語り合いのひとときを過ごしていました。

このほか、市内へのドライブや、皆で回転寿司を食べに出かけるなどのイベントもあり、**バラエティ豊かな活動**が売りのカフェだったようです。



(オーパでのカフェの様子)



コロナ禍の中でも、カフェをできる限り開催するよう、関係者はさまざまな工夫を続けてきました。例えば、感染防止対策用のアクリル板が品薄だった時期には、身の回りの段ボールやごみ袋などを使い、仕切りを自作しています。



それでも、令和2年の3～7月にかけてと、令和3年1～3月の間は、緊急事態宣言や盛岡市内での感染拡大により、カフェの開催を中止しています。

参加者の間では、仕方ないとの受け止めが多かったようですが、再開の際に受付で自分の住所氏名をうまく書けなかったり、居場所がなく徘徊してしまったりするなど、認知症の状態が悪くなってしまった方もいたとのこと。

定例のカフェ会議は、カフェ休止中も途切れることなく開催を続け、再開後の取組を話し合ったり、参加者とリモートでつなぎ、再開後にどんなことをやりたいか、意向確認を行ったりしたとのこと。

え、リモート？と思うかもしれませんが、相手の参加者はリモート会議が初めてだったものの、つながる様子が新鮮で、結構楽しんでいたそうですよ（もちろん、接続作業はカフェ担当者が行っています）。

参加者からは「大きな声で歌いたい」「みんなで楽しく食事をしたい」「ときにはみんなで出かけたい」という希望が出ていますが、今はまだ我慢の段階です。

休止中の取組の中で、特に見事な仕上がりがりだったのが、令和2年春の休止時に発行した「ゆざわの森カフェ通信」。

通信は参加者への送付だけでなく、湯沢地区の回覧板でも情報提供。

このことが、結果として地域にカフェの存在を知ってもらうきっかけとなり、中には「ボランティアとして参加したい」と言ってくれた方も。世の中、何が幸いするかわからないものです。通信が、2号で止まったままなのが惜しまれます。



## ゆざわの森カフェ通信

～オーバてまた会いましょう～

**創刊号**  
令和2年5月発行  
発行・編集  
ゆざわの森カフェを運営する会

ゆざわの森カフェ再開準備中!!

3月、4月と同様に5月のカフェも中止を決定しました。新型コロナウイルス感染症の先の見えない自粛生活、ついついため息が漏れてしまいますが、森カフェ再開を心待ちにしてくださる声が聞こえるたびに、私たちの心の励みになっています。

さて、今年度もたのしいひと時を過ごせるよう、様々な企画を練りながら再開に向けて準備をしています。秋のドライブや冬の餅つき、クリスマス会、きよしのストロベリー体操。そしてオーバのコーヒーでリラック。それまで、ぜひ皆さん元気の貯金をお願いします。そして再開した晩には笑顔でお会いしましょう!!

●できるだけ体を動かしましょう!

例えば…

- ・人ごみを避けて散歩をしましょう
- ・掃除や洗濯、庭いじりなど、家の中でできることで体を動かし、座っている時間を減らしましょう
- ・普段している体操を、ご自宅でも続けましょう（シルバリーハビリ体操やラジオ体操など）

●規則正しい生活リズムを心がけしっかりと睡眠をとりましょう!

- ・朝起きたらカーテンを開け、太陽の光を浴びましょう

●3食バランス良く食べましょう!

- ・特に、肉・魚・納豆など、たんぱく質を積極的に摂りましょう

●よく噛んで食べ、お口を清潔に保ちましょう

盛岡市保健福祉部長寿社会課 新型コロナウイルス感染症を予防しながら体力維持につとめましょう。【チラシ】より転載

ねほい  
はほい

## インタビュー

今号のインタビューは、盛岡市飯岡・永井地域包括支援センターの認知症地域支援推進員、尾形京子さんです。

「認知症カフェ」の日頃の運営や再開、今後の展開などについて伺いました。



—まず、最近のカフェの開催状況について教えてください。

毎月第3月曜日の午後に、カフェを開催しています。内容は、毎月第2金曜日の昼に、ボランティアとカフェ会議を開いて決めています。コロナの影響で、1～3月にお休みしましたが、4月に再開しました。

—休止の間、参加者のつながりをどう維持してきましたか？

お休みの間もカフェ会議は継続して、再開後にどうするかを話し合いました。参加者にも、リモートで何をしたいか確認したりもしました。

また、以前はカフェ通信を発行して参加者に送ったり、地区の回覧板で回したりしました。

—4月の再開に、不安はありませんでしたか？

その時点で、地区内に感染者がいなかったのと、人口当たりの感染者数が低かったため再開を決めました。感染防止対策をきちんと取っているのと、包括や施設の専門職が立ち会っている安心感からか、あまり不安の声は出ていません。

—再開に当たって、特に気を配ったことは何でしょうか？

やはり感染防止対策ですね。前は、緑生園さんのカフェ（オーパ）で開催していま

したが、営業を休止したため、現在の地域交流活性化センターに移転しています。以前は30人以上いた参加人数を、20人前後に抑えたり、手作りの感染防止パネルを作ったりしました。

前はカフェタイムのおしゃべりや、ケーキやソフトなどのスイーツが楽しみの一つでしたので、提供できないのが残念です。コロナ禍が落ち着いたら、早く元に戻したいです。

—開催に当たって、包括からはどのような支援をしていますか？

アルコール消毒薬や物品を購入する資金として、さわやか財団や民児協からの補助金申請を支援しました。年度は別ですが、それぞれ10万円の助成を受けています。

また、包括では毎回カフェや会議に参加して、検温や情報提供、介護相談などの支援をしています。

—今後、包括として認知症カフェをどう支えていきたいですか？

ゆざわの森カフェは今年で4年目を迎えました。ボランティアも増えて、地域で支えるカフェに成長しました。参加者がもっと主体的に関われるように支援していきたいです。

また、認知症高齢者の居場所はまだまだ足りません。2か所目の立上げを支援したいと考えています。

——住民や参加者が主体となるために、どのように取組を進めていますか？

毎月のカフェ会議で、運営内容や当日の役割分担を決めています。ボランティアが検温やお茶出し、会場の準備、チラシの配布などの役割を自主的に分担しています。

企画のアイデアもどんどん出してもらっていて、地域には技を持つすごい人がたくさんいるので、次はあの人に頼んでみる、という話が気軽にできています。

包括の役割は、どう自発性を引き出すかですが、現在はノープランでもうまく回っているの、会議に毎回出ても全く苦になりませんね。

——苦勞の多い中でもカフェを続けてきたことで、こんないいことがあった、というエピソードはありますか？

包括の立場から見て、活動の広がりが目に見えて感じられるのは、とても嬉しいです。カフェを始めたときは、5人の委員しかいませんでしたが、ボランティアや地域住民の協力を得て、ここまでやってくることができました。うちでもやってみたい、という声もあります。

あと、カフェがスタートした当時から参加している認知症の方がおられますが、状態が悪化せずに参加を続けていますね。

——認知症地域支援推進員として、他にはどのような取組をされていますか？

カフェの他に、認知症サポーター養成講座の教材を、動画を入れて分かりやすくするよう工夫してみたりしています。生活支援コーディネーターも兼務していて、地域に顔見知りが多いことが、活動の糧になっています。相談活動や地域ケア会議なども担当しており、包括の人員が少ないので、ギリギリで忙しいですが、やりがいのある仕事です。

あと、管内では、別団体のイベント「注文をまちがえるカフェ」の準備も進んでいて、運営に関わっていますが、地区の高校生たちが主体となって企画している珍しい取組ですよ。

——県内の認知症カフェ関係者の皆さんへのメッセージをお願いします。

認知症の人が楽しく自主的に参加できて、関わる皆さんが楽しく過ごせるカフェを目指しています。気張らずに、気軽に開催してみたいかがでしょうか。「楽しい、美味しい、素敵」が、継続のポイントと考えています。

——お忙しいところ、ありがとうございました。

「ゆざわの森カフェ通信」第2号（R2.7発行）より抜粋

## ゆざわの森カフェでは一緒に活動する仲間を募集中です!!

新型コロナウイルス感染症も落ち着きを見せてきたこの頃ですが、もうしばらくは我慢のとき。ストレスを溜めすぎないように上手に気分転換しながら過ごしていきたいものです。イライラしたり不快感を覚えたりするときや**ストレス**を感じる時は、緊張状態で**浅い呼吸**になりやすいもの。そんな時は**腹式呼吸**がおすすめです。

- ①まず、口から息を吐ききります(お腹がへこみます)
- ②4秒かけて**鼻からゆっくり息を吸う(へこんだお腹がでる)**
- ③4秒息を止める(我慢は禁物、自分のペースに合わせてやりましょう)
- ④8秒かけて**鼻からゆっくり息を吐く(お腹がへこむ)**。

これを1日5分やるだけで、心が安定してきます。(※食後は避けてください)

さて、ゆざわの森カフェを運営する会では、**活動を一緒に考え、協力してくださる仲間を募集**しています。**無理せず、楽しくをモットー**に自分の予定と相談しながら、できる範囲の活動で構いません。一緒に森カフェの活動に参加していきましょう！一緒に活動できる方のご連絡お待ちしております。

⇒☎639-2528 都南あけぼの荘介護支援センター(担当:佐藤、熊谷)まで



## どう「認知症カフェ」を再開していくか

カフェの再開には、特に高齢者施設や病院等を会場としている場合、**会場や運営スタッフの確保**、カフェとは切り離せない**会話をどうするか**など、特有の課題があることがわかりました。この点を、どうクリアしていけばいいのでしょうか。

県内の小規模な市町村のように、感染者がほとんどおらず、市中感染の危険性の低い状態が維持されている場合は、感染防止対策を講じて、従来に近い形で再開するのものの選択でしょう。

ただ、歌の会や大皿での茶菓の提供などは、見直した方がいいかもしれません。



また、他県では**カフェのオンライン化**を推進するところもあります。場所を選ばず、人との接触が限定されることで、感染防止には効果があるとされます。

一方で、運営側・参加者側とも、誰もが機器を使いこなせるわけではなく、参加できる人が限られること、カフェの雰囲気が変わり、モニター越しでは話しにくいことなど別の課題もあり、もう少しノウハウの蓄積が必要でしょう。

会場について、病院や施設での開催を当面見送るのは、**入所者・利用者の安全が最優先である以上、やむを得ないこと**とされます。会場を施設外にする、介護スタッフ中心の運営を、元気高齢者のボランティアに移管するなど、**開催方法の大きな見直し**や、一時的に他のカフェに参加者の受入れを依頼することも必要かもしれません。

会話をどうするかは、カフェの根幹にも関わる問題であり、難しい問題です。

いっそ思い切ってローテクにしましょうか。耳が遠くても近づかずに話ができる、誰でも作って使える秘密兵器・**糸電話**を、レクを兼ねて導入している団体もあるようです。

県内外には、たくさんの認知症カフェがあります。楽しい工夫は、他にもまだまだあるのではないのでしょうか。「**うちでは、こんな方法を取り入れているよ!**」というカフェなどありましたら、**編集部にぜひ情報をお寄せください。**

「ゆぎわの森カフェ通信」創刊号（R2.5 発行）より抜粋



### 【体の元気はお口から】

のどの筋肉を衰えさせないために、日頃からよくのどを使うことが大切です。**人としゃべる機会が減ると要注意!** 声を出す機会が減ると、のどの筋肉がどんどん衰え、飲み込む力も低下します。なるべく大きな声でしゃべったり、歌ったりして、のどを使うようにしてみましょう。

いつものように出かけたり、友人と会えないときは、電話を試みる、新聞を声に出して読んでみることもおすすめです。





## 「注文をまちがえのカフェ」開催

「こっちもおいしそうだし、ま、いっか」

認知症への理解促進などをテーマに、全国に取組が広がる「注文をまちがえる料理店」。そのカフェ版が、7月11日(日)、盛岡市の飯岡地区農業構造改善センター駐車場で開催されました。

主催は、若者向けのイベントを数多く手がける「ドリーム・シード・プロジェクト」。高校生が中心となって企画し、飯岡・永井包括と都南あけぼの荘介護支援センターが共催しています。右の素敵なポスターも、高校生の手によるもの。

今回は2回目の開催。去年はあいにく、新型コロナウイルスの感染防止のため中止になりましたが、今回は屋外のテイクアウト方式に改めています。類似のイベントは各地で行われていますが、テイクアウト方式での実施は、たぶん国内初とのことです。

当日のお天気は曇り。梅雨時で雨が心配でしたが、自称「究極の晴れ女」尾形さんの“神通力”により？雨雲が会場周辺を避けているのが、当日のアメダス画像でよく分かります。包括のサポートは、周知や物資の調達だけでなく、気象にも及ぶとはモネちゃんもびっくりです。欲を言えば、もう少し涼しければ完璧だったかも。

会場で大いに存在感を発揮しているのは、ポスターにも描かれた水色のキッチンカー。今日のメニューを提供する SoRaCafe(盛岡市北飯岡)の車両です。

メインメニューの「わふ」は、令和元年に別のプロジェクトで、「岩手のおみやげ」として中高生たちが開発したワッフルバー。見た目も美しく、種類もいろいろ(周囲では、チョコベースのわふが特に好評でした)。

その中から、ワッフル2本の組合せが3種類(①銀河鉄道&もりおか林檎、②のだ塩キャラメル&上弦の月、③三陸鉄道)登場。これにコーヒー、紅茶、レモネードのいずれかをセットして、500円のワンコイン制です。

ちなみに、ドリンクのロゴは、前夜に高校生が手書きで書いたもの。

お値段は一律ですが、全部で9通りの組合せがあります。まちがえずに売り切ることができるでしょうか。



学生はつくる。  
「注文をまちがえるカフェ」  
「注文をまちがえるなんて、  
変なカフェだね」  
きっとあなたはそう思うでしょう。  
私達のホトで働く従業員は  
みんな認知症の方です。  
ときどき注文をまちがえることを  
どうかご承知ください。  
そのかわり、どのメニューも  
ここでしか味わえない  
特別においしいものだけを  
そろえました。  
「もちもおいしそうだし、  
ま、いっか」そんな一言が  
聞けたらと思います。  
ご来店ありがとうございます。

今日のスタッフは、**認知症の方が4名**。  
屋外での実施のため、今回は自立度が高  
めの方が対応。**高齢者は受付、オーダー取  
り、配膳などをそれぞれ担当し、高校生が  
サポートします。高校生は盛岡一、盛岡  
三、盛岡四、不来方、中央など近隣の高校  
から、主に医療や福祉の道を志す12名が  
参加しています。**

高校生たちをきびきびと指揮するイケ  
メンが、学習塾とカフェを運営する  
SoRaStars(株)の**山崎智樹代表**。今回のカ  
フェの仕掛人です。



お客が集まり始めているので、予定より早めに  
開店。家族連れが多く目立っています。

受付で体温測定のと、メニューからお好きな  
「わふ」とドリンクを注文。受け取る前に、スタ  
ッフと**チェキで記念写真**を撮ると、カップの**風鈴  
に写真**が付いてくる趣向です。隣では、シトラス  
リボンの作成実演もあります。上空には撮影用の  
ドローンも飛んでいます。こういった企画は、春  
から**6回、オンラインでの打合せを重ね、アイデ  
アを練り上げてきた**とのこと。



「わふ」の中には、「三陸鉄道」のようにすぐ  
売り切れるものも。12時前後には特に混み合い、賑やかな笑  
い声が広がっていました。13時40分までの約3時間で、お  
客は**91人**。注文が集中して、**一部の飲み物を取り違えたこと  
もあったみたい**ですが、「ま、いっか」。



店じまいの後、高校生から高齢スタッフに感謝のメッセージ  
が贈られ、双方とも「**とても楽しかった**」と、さわやかな笑顔  
で話していたのが印象的でした。ずっと見守っていた尾形さん  
も、テイクアウト方式のカフェに手応えを感じていた様子。



受付担当の**佐々木希音(ねね)さん**(不来方高3年)によると、「**学習  
塾に中3のときから通っていましたが、先輩の活動を見て過去のプロ  
ジェクトに参加し、楽しかったです。今回も山崎先生から声がかかり、  
参加しました。初めてグループ  
リーダーを任せられ、コロナで緊  
張感もありましたが、みんなの  
おかげで楽しく終わることが  
できました。**」とのこと。将来は、祖母のような保  
健師になりたいそうで、当事者に触れあうこのよ  
うな地域活動は、よい学びの機会にもなったよう  
です。



## ～編集後記～

こんばんは。取材班「ふ」です。認知症か、高齢者かどうかを問わず、地域のいろんな方々が集まって話したり、居場所として見守りを行ったりする認知症カフェは、決まった形はありません。多様な取組とのコラボが期待でき、まさに、**認知症地域支援推進員の腕の見せどころ**といえましょう。

これまで、取材班はあちこちの現場を取材し、介護予防や認知症施策、生活支援など各分野で、**独自の発想や思いがけない社会資源の組み合わせから、新たな取組が始まっていくのを**、内心感動しながら見守ってきました。コロナで一旦は急ブレーキのかかった取組も、**別次元の発想**で解決するひとが、きっと出てくることでしょう。若い力も着実に育っています。地道に感染防止対策に努めつつ、その時を待ちたいと思います。

「別次元の発想」で思い浮かんだのが右の写真。**某うどん県の鉄道会社の若手職員が作成した**、踏切横断防止対策の掲示です。無味乾燥になりがちな掲示を、ギャグの世界に昇華したぶっ飛んだ発想とそれを受け止めた会社、いいねえ。（取材班 ふ）



認知症施策担当の「た」です。今年度から担当になり、今回、初めて認知症カフェにおじゃましました。まず反省したのは、自分の中に「カフェとはこういうものだ」という枠が出来てしまっていたことです。とにかくバラエティに富んだ内容を、ラフに行っていることが印象的でした。なぜこんなにも地域の色々な特技を持った人が集まってくるのか、一つはカフェの持つ**“ゆるさ”**、「無理なく、楽しく」の**雰囲気**が人を呼ぶのかも入れないと感じました。

現在、多くのカフェでは思い通りにいかない状況が続いていると思います。考え方もさまざま、どれも間違いではないと思います。実行に移すことができなくても、今個々が考えていること、ささいなこと、でも行動したことは、きっと時間をかけて花を咲かせると思います。皆さんの活動が少しでも実を結ぶよう、私もできることを積み重ねたいと思います。（取材班 た）

## がんばる地域の情報、大募集！

「ちいきで包む」編集部では、住み慣れた地域で暮らし続けたいお年寄りを、地域ぐるみで支える取組について、情報を募集しています。下記までお寄せください。

「ちいきで包む」は、岩手県内市町村の地域包括ケアシステム構築をアシストするため、各地の特色ある取組や、関係する情報を発信する情報紙です。

企画・発行（問合せ先）

岩手県保健福祉部長寿社会課（本号担当：藤原・田中） 令和3年7月29日発行  
TEL:019-629-5436 FAX:019-629-5439 E-mail:AD0005@pref.iwate.jp